［現地報告］

中国と中央アジア：接触地域の現場検証

岩下明裕

はじめに

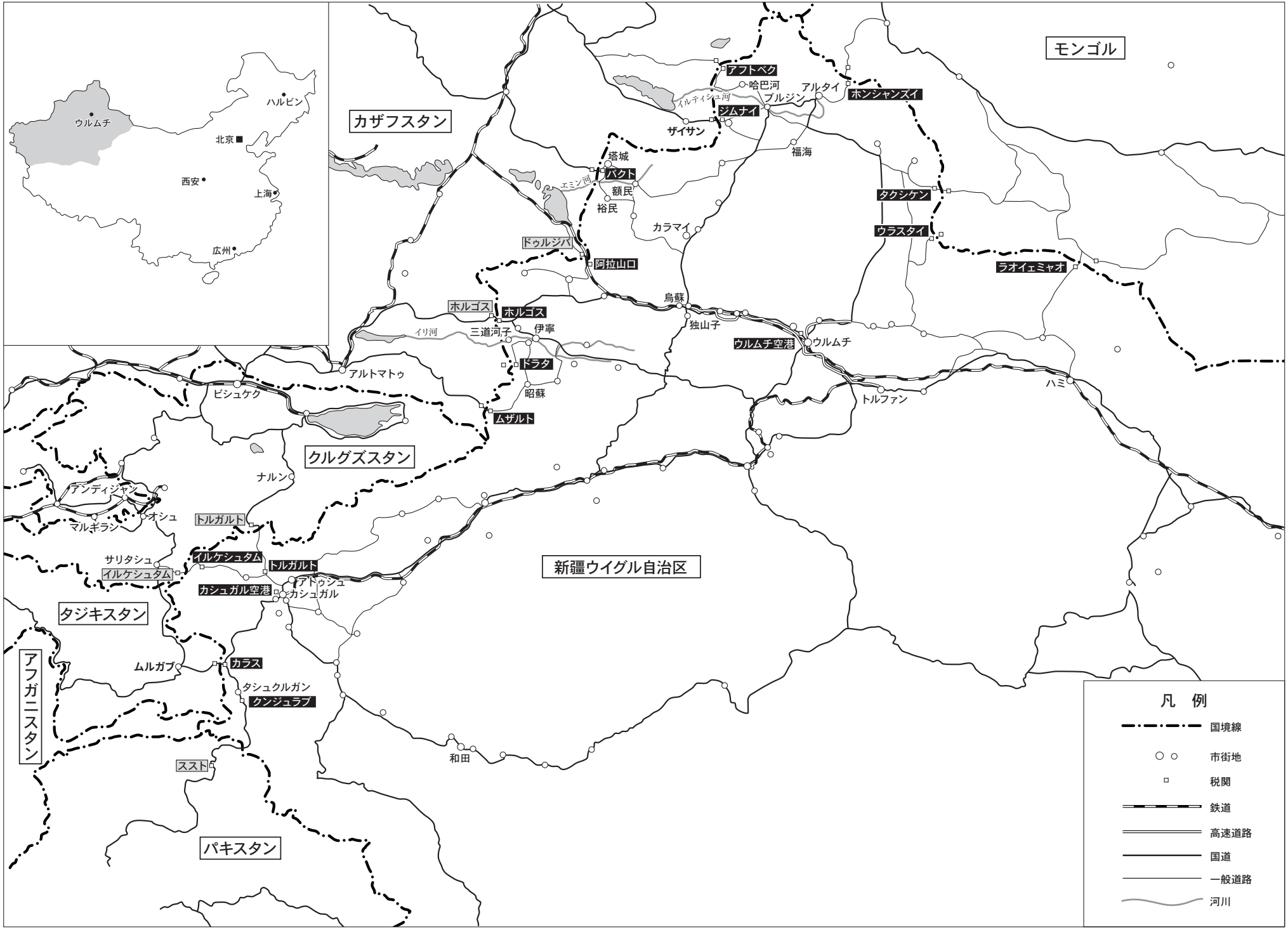
中央アジアを取り巻く国際環境に関心を有する人々のなかで、昨今、最も注目を浴びているファクターの一つが中国である。ＣＩＳの枠組などを通じて中央アジア諸国の多くといまだに強い結びつきをもつロシア、「９．11」以降にわかにそのプレゼンスの意味を論じられているアメリカと異なり、中央アジアにおける中国の意味をどのようにとらえるかは、ある意味で不明瞭である。例えば、カザフスタンの識者の一部（M. アウエゾフ国立図書館館長、K．シロエシュキン『コンチネント』外部編集員など）には激しい「中国嫌い」が確固として存在する一方で[1]、アタスから阿拉山口へのパイプライン建設が急ピッチで進み、将来的には中国が輸入する原油の20%がこのパイプラインを通過することが予想されるなど、中国とカザフスタンは「死活的な経済パートナー」になりつつある。直接、国境に面していないゆえに中国とウズベキスタンは「矛盾のない」自然なパートナーであるはずだが、中国への警戒心を緩めず、上海協力機構を徹底的に批判するA．ホジャエフ（大統領付属戦略研究所）と、中国の存在をとるに足らないとみなすA．ウマロフやD．パシュクン（ウズベキスタン国立大学社会政治学部）らとの認識の溝は深い[2]。過大評価と過小評価、中国の存在に対する認識が両極端に割れるのも、地域における中国の現実がどのようなものか十分かつ客観的に検討されていないからだと筆者は考える。

そこで本稿は、中央アジアにおける中国のプレゼンスを精緻に理解する一助として、中国と中央アジアの接触現場、つまり新疆ウイグル自治区（中国）とカザフスタン、クルグズスタン、タジキスタンの隣接地域（中央アジア）の現況を紹介したい。筆者がカザフスタンと北疆の国境を最初に踏査したのは、2002年２月のことである。このときはアルマトゥからの直通列車でウルムチに向かい、岐路はイニンからホルゴス経由の自動車ルートを用いた。以後、筆者は、2003年から2005年春先にかけて、タジキスタンの山岳バダフシャン、カザフスタンと北疆、クルグズスタンと南疆の国境地帯を断続的に調査した。本稿は地域全体に対するまとまった分析というよりは、その前段階として、筆者が取材し、収集した情報や資料を整理したものに過ぎないことをあらかじめお断りしておく。

---

1 アルマトゥでの聞き取り、2005年１月19-20日。

2 タシケントでの聞き取り、2005年１月24日。See, A. Umarov and D. Pashkun, The Prospects for Chinese Influence in Central Asia, *CEF Quarterly: The Journal of the China-Eurasia Forum*, February, 2005, pp. 12-15.



新疆ウイグル自治区の対中央アジア国境税関